

## 教科横断型の総合的学習

岡 村 浩

### 一、諸言

新潟大学の掲げる第3期目標中期計画に、「地域の教育力」等を活かした授業科目の整備がうたわれている。この用語の指し示す意味は、固定出来るものではない。筆者は、大学の立地する新潟県を地域と捉え、地域に深い知見を有する教員養成のプログラムの一提案として、本稿にその授業内容の骨子を綴るものである。

### 二、授業計画

#### 第1回 ガイダンス

##### <構成>

新潟大学の概要と歴史 十学部と教育学部の位置付け  
 會津八一の記文にみる創成 本学図書館資料と新聞記事  
 新潟県の概要

○大掴みな歴史 ○上・中・下越の地理および自然 ○県民気質 ○地主・庄屋制による広大な田地を背景とした社会構造と文化 ○河川による舟運と物資の往来、交通網 ○江戸期までと明治以降、新潟県の近代化 ○湊町新潟の情緒

#### 第2回 日常と言語活動

##### <構成>

挨拶 その言葉の意味と実践  
 文字文化について 漢字・平仮名・片仮名の成立と機能性  
 和風の文化と所作 「和」の文字の形と意味するもの  
 四季の移ろい 新潟の場合

#### 第3回 文字の成り立ち

##### <構成>

東アジア漢字文化圏 中国・日本・韓国を中心に  
 漢字3000年の歴史と楷・行・草・篆・隸五体、書風の変遷 誕生から今日まで  
 漢字から仮名へ（大陸文化の変容） 「一・二・三」「いろは」「アイウエオ」

#### 第4回 和風文化の粹

##### <構成>

仮名の誕生 当時の文字と時代の諸相

## 第5回 文字を書く

## &lt;構成&gt;

正しく整えてはやく書く 実用性への注目 縦・横書きの書式  
教育内容を実生活に応用する 書いてみよう

## 第6回 国語科教育における文字教育

## &lt;構成&gt;

小・中学校国語科書写教科書  
学習指導要領 抜粋・要点の理解

## 第7回 読み・書き・話すの一体化

## &lt;構成&gt;

新潟を舞台とする古典文芸・名作を取り上げる 活字で読み、作者の肉筆で読む  
○黙読 ○音読 ○感情移入して読み、一節を書き表す

## 第8回 新潟が輩出した偉人

## &lt;構成&gt;

書は人なり 各界、地域性に注目の上、何人かに言及する  
○政治家 ○財界人 ○教育者・儒者 ○書画家 ○僧侶・宗教家 ○詩人 ○歌人 ○俳人 ○医家  
○軍人 ○その他

## 第9回 道徳と結びつけて

## &lt;構成&gt;

良寛と知足安分 人柄と顕彰史 各時代が求めたもの  
小林虎三郎と地方の輝き 長岡藩と三根山藩 入徳館小学校  
前島密と国家観 近代事業と伝統  
越人の気質 様々な思いやり

## 第10回 各地域の魅力・下越

## &lt;構成&gt;

津川を中心とする東蒲原郡 今川魚心子・乙川大愚・磯野霊山・棟方志功  
赤塚を中心とする北国街道 松尾芭蕉・亀田鵬斎・十返舎一九  
曾根の代官所・巻を中心とする西蒲原郡 巻菱湖・新保西水・渡辺更響

## 第11回 各地域の魅力・上越

## &lt;構成&gt;

久比岐野地方 久比岐野画人展  
糸魚川と相馬御風 富山との県境 御風業績にみる自由律口語詩・校歌作詞・良寛研究

## 第12回 各地域の魅力・中越

## &lt;構成&gt;

第2の県都・長岡 戊辰戦争と第二次大戦  
柏崎文化の特殊性 ローカル新聞 趣味家コレクターの多さ

## 第13回 地域との連携

## &lt;構成&gt;

地域と連携した研究成果の発表会

- 新潟市西区「渡部氏三代画業展」 庄屋の文芸趣味
- 阿賀野市出湯「阿賀野市ゆかりの文人展」 越後府から平成の合併まで
- 寺泊求草「藤田邸一般公開と同家ゆかりの書画展」明治から昭和初期の地方を支えた政治家・篤志家
- 新潟市行形亭 付近の白壁通り
- 長岡市島崎「良寛の里美術館 特別展」 今良寛と称された人々
- 小・中・高等学校への出前授業 手仕事 日本文化

#### 第14回 学校教育との結び付き・模擬授業

<構成>

新潟の特色について、実地的な内容を簡明に伝えることを目標に、小・中・高等学校向けの内容を行う

#### 第15回 まとめ

<構成>

新潟だからこそ学べること

自分のふるさとの話題に置きかえる

郷土に親しみを持ち、各自の味わい方を他者・後進に伝える。

### 三、主な講義内容の紹介

#### (1) 基本事項 大学のこと

新潟大学は昭和24年(1949)開学の歴史を持つ、日本海側屈指の規模を有す総合大学で、10学部合わせて1学年約2300人に上る学生を数える。まず自分がどのような機関で学んでいるのか、足元をしっかりと見据えさせたい。

創世期に関わる、貴重な會津八一の肉筆遺文を読みほぐす。新潟大学附属中央図書館館長室に掲げられている會津八一のペン書の書類を額装にしたものである。その全文を掲出してみる。

「和漢書目録規則」を一閲して所感を書す 會津八一 戊子八月十七日

△総合大学程度の図書館には甚だ稀に国寶、重要美術の指定を受けたる図書を所有する場合をも考ふる必要あり

△貴重図書の巻物の長さを測定し記載しおくとともにその巻物を構成する紙の枚数をも記載する必要あり

△貴重図書は巻物の場合もあれども帖子本の場合にはその枚数を計算しおく必要あり

△大学程度の図書館には所謂書物のほかにかけもの、色紙、短冊等の一枚ものを蔵することも多くなるべきことを予想してかかるべきなり。しかもこれらの特殊の一枚ものには重要なもの多きことを記帳するを要す

△「碑文」といふ句が見ゆるも「碑文の拓本」とあるべきなり。又金石文には器物の銘文もあり、墓誌は碑文と区別するが学者の常識なり。その他扁額拓本、造像銘拓本などいろいろのものあるべし。これを碑文とはいひ難し。用語を改むべし。

△書物は著者によりて價あることは論なし。注釋者、翻譯、解説者によりて價值を生ずることも論なし。されどもその旧蔵者が相當の学者又は貴族なることによりて價值を認められること屢々なり。依てその書の旧蔵者の何人なるやに注意することは必要なり(場合によりては特に標記するを要す)。

△蔵書印によりて旧蔵者の何人なりしかに注意することも忘るべからざることなり。これは相當の素養あるにあらざれば不可能なるべきもとにかくかかる方面にも注意を怠るべからざること忘るべからず(但し普通人の蔵書印は問題にあらず)。

△表紙の模様(光悦本の如き)又は挿繪等によりてその書に重要性を與ふるものもあり。それらの点をよく理解しカードにも標記する必要あるべし(大学ともなれば寄附などにて貴重書を所蔵するにいたることもあ

るべきにつき今より注意しおくを要す)。

本紙は縦19.2×横13.2cm×7枚。身近のメモ用紙に一気に呵成に書かれたものと思われる。金石文に関する語句の説明に一つの見識を示しているのが興味深い。

尚、これがいつ額に仕立てられたのか不明だが、本紙の端にはとじ穴が開けられており、図書館の方に開けば、書類綴りの中から発見されたものだという。署名脇の「戊子八月十七日」とは、昭和24年のことで、八一は71歳。当時総合大学創設運動と軌を一にして行われた図書館の整備のため、「北日本総合大学期成同盟会中央図書館専門委員会」が置かれ、八一も委員の一人に就任し、目録の作成方法や書誌学的な観点につき指導を行ったのだった。その経緯については『新潟大学二十五年史』(部局編)に記述があり、1034頁には「會津博士の目録整備に関する勧告」として、この額の一部の写真が掲示されている。

戦時中、蒐集した研究資料一切を焼失した八一は昭和20年郷里新潟に疎開、以降没する昭和31年まで新潟を離れなかった。そのころの新聞紙上に、たびたび「新潟の文化」の向上を唱える文章を執筆し、自ら新潟市や中条町その他で物資困窮の中、講演を行い続けている。文化に飢える時代に生きざるを得なかった文化人八一の呻きが、ひとと伝わってくる。

別に認められた「綜合大學を迎えて」(「夕刊ニヒガタ」昭和23年5月9日付掲載)と題する一文中、「大學といふのは…敷地の廣いのも、建物の立派なものも必要であるが、それより大切なのは、いい教師といい學生のたくさん集まることである。いい學生はいい教師のゐる大學でなければ集まって来ない。いい教師は器械や、標本や、参考書が必要なだけ設備してもらへないやうなところへは来てくれない。だからかうした設備のことは敷地や建物よりずっと大切だ。…」とある。本学所蔵の額装勧告書も、紙は黄ばんだがその筆力の瑞々しさは色褪せず、八一の主張が言辞の強い響きとともに看取される。図書館の誇る重要資料として大切に扱い、そして多くの方々に味読してほしいものである。

### 拠点・新潟湊町の情緒

新潟は江戸期、北前船の寄港地としてさかえた。物資の集まるところには人々も参集し、名目上五大港の一つとされた明治初期頃には、大阪を押さえ、全国一の人口を誇っていた。2021年には開港150年記念を迎える。幕末から明治近代化の様相が新潟市内に点在して窺えるが、注視する視座をもっていなければ、日ごろ意識することは乏しい。実在を確認する著名な中世の人物では上杉謙信(1530～1578)がいるが、その確たる筆跡の伝世が殆どみられないように、江戸期以前になると曖昧な事柄が多い。取り扱う資料(史料)は、各自受講生が見て触れられる身近なもの、江戸後期以降分を主として、現代社会の成立を探る目的で、それら近世資料を取り上げる。そして今日までの歩みを確認したうえで、明日の社会とくらしのあり方を考える道しるべと捉え、往古と今日、未来とを結び付ける思考を底流に備えさせたい。

今日、小路探訪が盛んとなり、地域の魅力再発見につながっている。新潟市の場合も、シティガイドの作成したモデルコースがある。それらを参看しつつ、本講義では「湊町新潟の情緒」をテーマに掲げ、話題提供の元、最終的には受講生による手製の新潟市内文化財マップ作成を目指す。市内で最も由緒のある白山神社、戦没者を鎮魂する護国神社、メインストリート古町通り、堀の名残を留める西堀通、北陸に名が響く鍋茶屋と行形亭等の割烹と芸妓文化、国指定重要文化財で88年の歴史を刻む第三代目萬代橋等、いくつかの視座を提供する。

例えば両神社境内には、新潟で初めて新聞を発刊した「坪井子敬」をはじめ個人顕彰碑、北原白秋「すなやま」等の文学・詩歌碑、明治の三筆・日下部鳴鶴揮毫による維新の原動力となった竹内式部顕彰碑等、多分野にわたる名碑が建つ。狛犬の台座をみると、遠く県外から移入されたものがあり、舟運による各地の結びつきが窺え興味深い。白山神社に隣接する白山公園は、我が国最初の開園式洋風公園でもあり、築山や池、自然に、四季の見どころを含む。名前が示すかつての堀割や柳、寺町の風情を西堀通界隈に散策することも薦めたい。

以上の拠点の解説は一回分の講義では話し尽きないため、毎時基礎的講義内容として取り上げる。

2つ目の重要テーマとして、日本語表記の起源を探ることから、国語における「書く」ことへのこだわりを視点を育成する。

## (2) 上・中・下越各地の特色 津川を中心として

麒麟山と阿賀野川・常浪川に囲まれた風光明媚な土地。歴史的には明治16年(1883)新潟県に編入されるまで福島県であった複雑な性格を有す。今でも両県にまたがる当地ならではの暮らし、文化的営みが看取されるはずである。時間が止まったような雁木発生の地ともいわれる町内が、5月3日「きつねの嫁入り行列」の奇祭を開催、この時ばかりは沿道が人であふれ、昼夜幻想的な物語に酔い知れる。公式発表では3万人の来遊者とのこと。奇祭の日と会期を重ね、町民有志が町の後援の元、「ふるさと阿賀町作家展」をふるさと交流川屋敷で開催する。絵画・書・写真・ちぎり絵・陶芸・粘土人形等幅広い分野の作家出品があり、筆者も第1回展から協力出品している。新潟大学「ビジネス書道入門」聴講生約120人に鑑賞を課しているが、熱心な見学の姿勢が会場に置かれた感想文向けノートの記述や、当方に提出されたレポートの内容から読み取れる。

特筆すべきは、平凡なハコ物施設での展示ではなく、大きな広々とした窓越しに、麒麟山と大河とが展開する光景を堪能しながら、それを背景にして現代美術を鑑賞出来る点にある。この場所だからこそ体験し得る、自然と芸術のコラボとあってよい。

レポートに関しては、現地に到着するまでのローカル線・磐越西線乗車時の車窓の光景や、町内を歩き体感したことを綴ることも求める。町内での挨拶1つをとっても、新潟大学の代表の一人としてみられている自覚を持ち、出掛けさせる。

冒頭述べた両県に関与する当地の歩みは、「阿賀路の会」の機関誌『阿賀路』に記録が留められてきた。平成29年6月に第55集が発刊された。筆者は表紙解説を毎号担当、毎年総会、記念講演に参加し、会員との交流を深めている。

この天然美に誘引され、多くの文人墨客の足跡が残る。棟方志功・安倍能成・竹匠の飯塚琅玕斎・指頭画家の味方海山等、これらの人々の事歴について筆者は『阿賀路』に各論を発表してきたが、その集大成として平成23・25年の2回、「阿賀町ゆかりの文人展」を地元の方々と開催、1回目は個人蔵、2回目は学校公的機関に眠る作品の発掘に多大なる成果を上げた。

地元の生んだ人物としては文人僧侶で「今良寛」と称された今川魚心子(1905～1984)、柔道家の西郷四郎が出て、人々の尊敬を集めている。

<キーワード>

麒麟山・阿賀野川・常浪川の自然・棟方志功・磯野霊山等文人墨客・とんぼと称す雁木の街並み探索・「阿賀路の会」・「越後と会津を語る会」

## (3) 上・中・下越各地の特色 糸魚川を中心として

平成28年12月の糸魚川大火によって、富山県境の北陸地方都市がクローズアップされている。これまでも少なくとも2回、明治44年(1911)と昭和3年(1928)にも大火にみまわれ、市の中央部に甚大な被害が出ているが、その都度復興を果たしてきた。私は相馬御風の文芸活動に注目し、10年余り現地に調査を重ねて平成22年『相馬御風遺墨集』(全2冊)を編集、出版した。この御風の生存中、先の2回の火災に遭遇、随筆記事の中に復興に向かう記述がみられる。「何一つ残さずに焼き払はれてしまった」、また土蔵一棟を残し焼失してしまったところから御風も再起した。

当時、交通の便がさほど良くないここ糸魚川に、御風詣とも称すべき各地からの文人来訪があった。それ位当時の文芸界において、御風の位置は大きなもので、北大路魯山人・北原白秋・會津八一等との交流はとくに注目すべきである。これら名流と地方文化との接点を探り、今日の糸魚川のなりわいの原型と認められる昭和30年代までの当地文化史を浮彫りにすることを、講義の主たる目標とする。

<キーワードとして>

塩の道・翡翠・フォッサマグナ・美山公園の景勝・相馬御風と著書『大愚良寛』。

<学習方法>

糸魚川歴史民俗資料館所蔵資料の提供を受け、プリント化して配布。読み、分析する。

市内各校の校歌を御風が作詞している。一般児童の中に、どれ位御風の存在が認識されているのかを実地調査する。また市外、県内外の作詞も多く手懸けている。受講生自身の校歌を改めてふり返し、その言い回し、歌詞からふるさとの魅力を味わう。

市内に点在する御風自筆歌碑を見て回り、街並みに生きる歌の内容を鑑賞する。

相馬御風顕彰会「御風会」が当地文化団体の老舗として活動を続ける。筆者は毎年5月6日、祥月命日に市内大町の県指定史跡「御風宅」で開かれる「御風忌」に参列し、一般の方々が御風を自然に慕う光景を目の当たりにしている。この御風会会員に取材し、今に生きる先人の姿を追う。

#### (4) 上・中・下越各地の特色 赤塚から学ぶもの

これまで新潟市立木山小学校に創立70年、赤塚中学校創立150年記念行事に学生を引率して出前講義、赤塚小学校の国語科書写の授業に学生と共に指導に伺っている。また、赤塚中学校及び赤塚地区コミュニティ協議会共催事業として、北国街道を訪れた文人の話を見せて頂くなど、この地の教育機関との縁が生じた。各校に地域コーディネーターの方がおられ、学校と学外地元との結びつき、既存の教師と生徒間のやりとりには止まらない、包括的な教育補助に尽力する姿に接して、学校現場の実状の一端を教えられた。地域の応援を必要とする学校・要請に応える老壮を問わない人々。赤塚の場合、ラムサール条約締結で知られる白鳥の飛来地「佐潟」があるのと、新潟砂丘の恵地が広がっている。潟のもたらした恵み、自然植生と農業、レクリエーション空間、地主中原邸の保存と公開活用、松尾芭蕉や十辺舎一九、亀田鵬齋等の来越があった北国街道筋に根付いた、俳諧を主とする文学芸術作品が、学びの対象に上がる。筆者は新潟市・コミュニティ佐潟・新潟国際情報大学・赤塚郷土研究会・赤塚中原邸保存会と協力して、これまで3回に及ぶ「赤塚地域の魅力とお宝展」を、メイワサンピアと新潟国際情報大学を会場として催した。越後平野の原型や旧街道の道筋を明らかにする展示品、個人愛好家所蔵書画の公開である。成人向けの企画だけではなく、未来に語りつなぎ、当地の魅力を今後のまちづくりに活用するために、例えば学校教育では、中学校地域コーディネーター・太田和宏氏の指導の下、美術教育の一環として生徒向けの鑑賞会が度々企画され、自分の住む土地への新しい視点の醸成につながることを期待している。

ここは新潟から弥彦詣に向かう街道沿いにある、新潟弥彦間の中間地点の貴重な宿駅として繁栄した。細い道筋に映る中には、確かに旅籠の跡が散見される。

#### (5) 上・中・下越各地の特色 新潟市を中心に

講義内容の骨子に、本県上中下越各地出身の人物を取り上げる。先の萬代橋だが、現在は三代目のコンクリート製の昭和4年竣工であることが新潟駅側東詰の欄干に記録してある。その初代木橋を明治19年に架けたのが、新潟文壇の首領でもあった八木朋直(1841～1929)である。米沢出身だが、戊辰の役後明治政府に出仕、理財算術にたけたところから出世を重ね、新潟市長・県議会議員・第四銀行頭取等、市内政財界の要職を歴任。これらの事歴は大抵書物に綴られているが、公職退任後、89歳の長寿を全うした晩年、狂歌と書画、篆刻の文墨界にも個性的な足跡を残していることは余りクローズアップされない。しかし白山神社等探せば書碑が点在し、護国神社には胸像と経歴を刻む一文がある。「柳雪」と号した彼は、間違いなく舟江の情緒を帯同した新潟らしい文士の代表で、周辺の政治家や上層階級の多くは、巧拙を抜きにして文墨趣味が篤かった。舟運と農業で栄えた越佐には、江戸期から名流文人の来遊が重ねられたが、受け皿となったのが八木氏のような重立ちで、この文化受容の図式は新潟の大きな特徴である。

荷物と共に寄港した人足は、古坊の花街に立ち寄り、文芸家もそれに準じた証になる詩歌が多く残る。地元に着く話題として読みほぐし、湊町の情緒を味わい日本文化の奥床しさが市内に点在することを意識させたい。因みに海が荒れて足止めを願う女性たちが祈願した「願掛け狛犬」が下町の正徳稲荷に設置され、その三代目を今でも回すことが許されている。傍らに先の八木柳雪の自筆狂歌「下の新地の道楽稲荷 己れも二三度だまされた」と刻む碑が建つ。

今ほどは、政財界人の文墨趣味を通して書画文芸が大正から昭和初期まではさかんであった時代背景に言及し、とくに要であった八木氏の存在を紹介した。しかし各界の文士にあって別格なのが、良寛(1758～

1831)、次に會津八一(1881～1956)。この二人は文人の括りに止まらず、もし両者がいなかったならば、本県らしい文化の多くが姿を消していたに違いない。本講義の目標とする新潟の歴史・伝統文化・地域文化・思想史等への幅広い関与を二人はみせてくれる。

#### (6) 人物を中心に 良寛について学ぶ

良寛については、生地出雲崎・修行地分水・終焉の地和島、他、托鉢の地、新潟・三条・西蒲原一体の風景と歴史に関連する。近年市内古町通りに「新潟古町てまり庵」と称す、誰でも自由に休憩がとれる良寛資料室がオープンし、偶々往来人にも好評を博している。係の方が紙芝居で良寛の一生を話してくださる。紙芝居といえば幼稚に思われるかもしれないが、良寛から何を学ぶか。少し関連する文を引用したい。

「あーはるも もう くれるのか、ひとも さくらの はなのように みじかいいのちを いっしょうけんめい いきて あわれに きえてゆく りょうかんさまは みを かがめて じめんに ちっている はなびらを 一つ 二つ 三つ 四つと じひのところで ひろいあつめて ゆきました」「みぶんの さべつや けんりよくを にくむ りょうかんさまは だいみょうや かねもちが どんな りっぱな てらを たてて あげようといっても しょうちしませんでした りょうかんさまに とって まずしい ごごう あん(五合庵)が どんな りっぱな がらん(寺院)よりも すぐれていたのです」。これは昭和40年代に出版されたと思われる『たかはし名作えほん 良寛さま』絵本の一節だが、小学生から取り扱いによっては、丁度大学生向けの清貧の思想と平等心を養う教材に、充分なり得る。「天真無欲」「慈愛」「感謝」「報恩」の学びを目標として、加えて文芸作「たくほどは風がもてくる おちばかな」の句意の紹介を絡ませ、身近に、現代風な緊張感を持って、いったい何が「立派」であるものか、偶像に過ぎない立派ぶりを拭い去って、生き方を正す指標に掲げらるであろう。

文中登場した「五合庵」をはじめ、遺跡は県下に点在する。その一つ終焉の地・長岡市島崎に平成3年開館した「良寛の里美術館」があり、企画展の鑑賞を全学向けの授業の一環で課している。提出レポートを読むと、道すがら地元の小学生から一般までの方々が、親切丁寧に案内をして下さり、話しかけていただいたことに驚き、感謝した文面が多い。見知らぬ初対面の小学生の方から大学生が「おはようございます」「こんにちは」の挨拶をされる。大学周辺では絶無の体験で、この地の人々の結びつきの日常が表れている。幼時より、大人が良寛さまを敬慕する所作を、当たり前のようにみる土地ゆえに、可能になる挨拶の習慣で、不思議にも学生の多くがこれを「懐かしい」と記す。天真への回帰に気付く瞬間で、書物での難しい説明をするよりも、実地を検証して学ぶ尊さがある。同じように地域にふさわしい生きた教材があって、本県に居住する間、良寛は子どもから大人まで日本人の多くに、切実な回帰点を示してくれる、そして深く現代的な意義を背負った人物として、近付きたい目標と捉えられる。

筆者の専門から付け加えると、挨拶につき「お早う御座います」「今日のご機嫌如何ですか」「左様なら」「お休み」、また「道」字の成り立ちを、交差点とそこに入ろうとする足跡のしんにょう、それに乗るのは正面を向いた首、したがって道は、脇にそれたり踏み外してはいけない字義であることを説く。伝統は型であって、窮屈さもあるが、型がなければその応用は本当の意味で生き生きしたものにならない。我が国の習いごとに諸道がある、良さと長所への漢字文化を多用してのふり返りを試みる。

良寛は自作詩に「今日乞食」と述べているが、実際晩年の存在は近郷に人柄、詩歌、文芸、書、道徳の世界で傑出した評価を得ていた。にもかかわらず、けっして人を扇動する気配もみせなかった。僧侶にして説法じみた所作が伝わらない。しかし例えば世話になった木村家の娘が若くして嫁ぐ折、戒語十一か条をしたため贈ったものが残っている。中に判りやすい、心に自と響く言辞が並び、その筆跡は、常の草書体と異なり、随分慎重に筆を運んだもので、少し前に書いたかと思われる位墨痕淋漓として瑞々しく光る。また或る時、弟の由之の長男・泰樹の素行が落ちつかず、周囲に頼まれて3、4日滞在したことがあった。一向に説法することなく、ついに帰りがけに泰樹に頼み、草鞋の紐を結んでもらった。その時、泰樹の首に良寛からの一筋の涙がこぼれ落ち、無言のうちに改心させた話がある。通常、人を注意する際、つい気が引けたり、逆に大声で感情のままに行ったりしがちな今日、これら2、3話は充分道徳心を感興する材料になろう。

### (7) 人物を中心に 會津八一から街並巡り

もう一人、第二の主人公・會津八一である。三人しかいない新潟市名誉市民、早稲田大学名誉教授・文学博士・新潟日報社社員。自詠歌書の評価が高く、高等学校芸術科書道教科書に筆跡が登載される。しかし、余程説明を付さなければ判り難い個性美である。一見歪みが顕著で、小・中学校書写で習う手本類とは180度に近い隔たりが感じられる。真に評価すべきは、学問が背景にある「書卷の気」で、「書は人なり」の言通り、何を成し得たかで生涯が輝き、書もまた輝いてみえる範例である。

新潟のメインストリート古町通りの生家跡に歌碑が建つ彼であるから、市内各所に偲ぶゆかりの地が点在する。その歌碑巡りをしつつ、晩年起居した北方文化博物館新潟分館を中心に、総合学習の一環として中・高校生の散策する姿にしばしば遭遇する。学習目標を立てるとすれば、

- ①新潟の偉人だが、その新潟らしさはどこにあるのか。勤勉、粘り強い性格を「文化の記憶館」を訪れることによって、他にも似たタイプの人物がいたことを大よそ理解できる。
- ②また詠歌「おりたてばなつなほあさきしほかぜの すそふきかへすふるさとのほま」を通して、故郷の大切さや、「ふるさとのふる江のやなぎはがくれに ゆふべのふねのものがしぐころ」より、昭和30年代まであった堀と柳の街並みを垣間見る材料としたい。

北方分館は築100年余り経つ和風建築だが、博物館と構えたところのない古民家の生活空間に、文化財を味わえる佇まいを体感出来る。水を張らない枯山水の名園から、侘びや寂びといった、閑雅な和の風情に、ひと時腰を落ちつけてみたい。

北方分館に隣接して、新潟商人の別邸を公開する斎藤邸と、日本料理割烹・行形亭の名庭も揃っており、そこに到る道は近頃「白壁通り」と命名の上、特別な石畳の仕様に道路が整備され、大学付近にはみられない趣を呈す。

町の活性化は全国到るところで急務の課題である。一例として古町通りでは、若手の起業開店がしやすいように、市と商店街の助成制度があり、歩けば学生は自分と同年齢の人たちが働いていることにまず驚くであろう。またその中に、歴史を有す店舗も存在する。入店して店員に話しかけ、地元の方から生きた話題を聞き出し教えることも大切な社会学習で、新潟の店ではそれを受け入れてくれる。良寛の姿を店の壁面にレリーフ板で掲げる「考古堂書店」や江戸期創業の和菓子「金巻屋」、八一の書を看板に掲げる「大阪屋」、新潟を代表するみやげの一つ笹団子「笹川餅屋」等が挙げられる。柳都とかつて呼ばれた所以を調べた上で実地調査に出掛け、巡る視点に ①人物の足跡 ②景観 ③会話を交えての取材 ④看板巡り ⑤美術館資料館巡り ⑥歌碑・文学碑巡り ⑦上古町（かみふるまち）、下町の寺町界限、地区同士の比較等々を提示する。

## 四、学校現場からの依頼

筆者の住む地域の新潟市立鑑郷小学校に毎年1、2回伺っている。6年生向けのキャリア教育や、学校には大抵古くから伝わる書跡が何点かあって、同校に明治の著名な文筆家・巖谷小波の珍しい楷書書額が伝わる。その鑑賞法に関する話題提供である。商店街まで歩くと遠い、角田山からの海風が時に吹きすさぶ自然環境に、学校は建つ。因みにここの学習支援ボランティアによる各学年指導内容をまとめた配布資料を、そのまま掲示する。

土地にふさわしい農業体験が目立つ。就中、筆者に何らかに関与が出来そうなものは、○町探険 ○書写指導 ○昔の西川と伝統学習 ○絵手紙 ○書初め指導 ○読み聞かせ、それと先のキャリア教育であろう。当然一人で全て出来るはずがないし、各方面の経験者が集まって、地域の宝である学校を支えている。

欄外の依頼文に読むように、他に協力出来そうなことを提案することも望まれている。学校と家庭、保護者を結び付ける地域の重要な役割を担っているのが、前述した通り地域コーディネーターの方々である。

## 五、授業形態及び評価項目など

上記を授業化する上での要点につき、項目を設けて簡述する。



### (1) 講義の基幹部分

15回の全時間を通して、地域学の根幹に関わる主軸の部分、新潟市を舞台とする「湊町の情緒」の視点につき、継続的に紹介を行う。また国語力の機能性に磨きをかけるべく、楷書と行書による書く練習の手本を配布して行う。ノートの筆記、日常の手紙文への応用、教師として板書及び国語科を担当した際の書写添削指導や、全教科に関わる生徒とのやりとり、提出物への付記、アドバイス等の場面を想定して練習に励む。一方、書くことと表裏一体の話すこと、話し方へのトレーニングも毎時意識的に実践の場面を設ける。

会話と同じく、書いた文字も書き方も、人に見られた方が効果的に学習が行える。受取人を想定した手紙も然り、また授業展開に不可欠の板書の練習も、模擬授業の中で積極的に実践を積ませたい。受け手として聴くばかりではなく、発問し答えを要求し、時に教室の黒板に書かせる。垂直な面に書く難しさ、教室の大きさ、相手の人数に即した文字の大きさや配列があることを意識し、様々な機会を設けて黒板に書くことを経験させていく。

以上の地域学と国語表記力の向上をはかるべく、毎時この2点に継続的に取り組む。

第10～12回講義で触れたのは、県下各地の教育委員会・郷土史研究会や有志団体と筆者が交流を行う中、共同して企画立案した展覧会である。各地のお宝として人物及びその遺品遺墨が大切にされている。その顕彰活動の実態について、準備の段階から学生を参加させる別の授業も開講しているが、ここでは土地を実地訪問、小学生向きにいうと「探険」するつもりと、地域の特色ある文化財の鑑賞をねらいとして、年間いくつか筆者の関わる企画の中から選び、各人の都合に合わせて見学を課するようにする。レポートを書く作文能力にも言及し、答えが一つではなく、多様な見方があるから当然のものだから、学生が主体的につむぎ出す感想文を文語体を用いてまとめることを求める。例として「渡部氏親子三代・丹池・解古・越山展」(平成29年7月8～10日)を新潟市西区小針の廣澤山瑞林寺で行う。大学周辺は今日、文教地区と呼ばれるものの、昭和中期には田畑が広がるばかりであった。近世治水に苦しみ、庄屋株が右から左に行き来することがしばしばだった頃、須賀の庄屋に生まれた渡部解古(1842～1915)とその親子三代の画業を追った企画展である。美術品の鑑賞に加え、滅多に入れない寺院の森閑とした佇まいを味わう喜びも得られる。かつて寺社は一般民衆の集う地域の拠点であった。その再現を期し、様々老若男女の参加するサロンの性格を目指す寺社は瑞林寺の他、少なくない。

寺における催しとして、會津八一の祥月命日の11月21日に新潟市中央区西堀通・瑞光寺で行われる法要「秋弔忌」がある。新潟市名誉市民の法要が没後60年を経た今も厳修されている様は、無言の道徳的学習にもつながる。年輩の方々の焼香の所作は、美しい。

### (2) 課題内容について

上記企画展を見学の上、レポートを聴講生全員に課す。別にもう1つの課題を設ける。

①模擬授業を担当するグループ。4人で1班とし、3班編成する。各班15分間で授業内容に加え、自己の特技・強味を発揮出来る流れに工夫させる。建物景観をクローズアップしたり、食に力点を置いたり、幅を認める。

この中で、授業内容の組み立て、(指導案略案作り)、話し方、発声、発問、板書、評価の方法等、毎時気にかけてきた部分の学習を整理して実践してみる。終了後は一連の流れを改めて整理した形の指導案を作成し直す。

指導案は、導入、展開1、その2、終結の作成と、副教材の活用法。山場の設け方。発問内容と予想される生徒の回答を重視してまとめる。

②地域探訪の結果をまとめるグループ。

(1)新潟市を中心とする班 (2)長寛ゆかりの地を中心とする班 (3)県下他地域、津川・赤塚・糸魚川・柏崎・阿賀野市等講義で触れた箇所の実地見学の成果をレポートにまとめる班。

各班は10名程度に分け、(1)のテーマを3班、(2)のテーマを2班、(3)のテーマを3班で構成する。

### (3) 学習方法

レジュメ配布資料の解説、および板書の効果的使用を主とする。

### (4) 評価

毎回取り上げる新潟市内の名物・見どころと、「話し書く」表現力について、講義及び実習二面にわたる力を見る。(2)で説明したように、あらかじめ班分けをして、地域に関するテーマで学びをまとめるグループと、学びの成果開発を目的とする模擬授業を担当するグループとを設ける。その発表内容を第一の評価対象とする。

もう一点、五、(1)に記したように学外に出掛け、あらかじめ提示した書画文芸・地域検証をねらいとする企画展を見学し、レポート(感想文)を綴る。価値観は決まっていない。自己の見方を明らかにし、用語を吟味して書きまとめる。感想文は手書きとする。そのための国語に関わる学習を毎時行う。

一般に出欠は評価基準の外にあるというが、筆者は受講生に対し公平な評価基準とする要素とみることを伝える。出席しなければ話にならないが、折角受講の機を得たのに、他人事の如き態度で臨む者が、実際少なくない。聴講許可者に1・2年生が多いこともあり、早期の主體的受講体制の定着をはかるため、無断欠席を少なくするように全体指導を行う。主體的な学びは教員側のよびかけや教授法ばかりではなく、やはり学生側の心懸け次第である。

## 六、おわりに

結びに。筆者は芸術環境創造課程書表現コースに所属し、担当講義は実技ばかりではなく、半分座学である。書とは習い事、まさしく書くことばかりと観念的に捉えられがちだが、日本中国各々の歴史、鑑賞、文字学、概論、そして教育法の研究等がある。決して狭い学問領域ではない。

近頃意識しているのは、就学前から小・中・高等学校教育、さらに成人一般教養を貫通する実用・実践・実務上の書文化の探求と分析である。そのために機あれば県内外への出前講義に応じ、学校現場を体感している。筆で書くことは皆無で、殆どが硬筆を用いての、極く当たり前の言語文化につながる内容である。県下にあつては各地、地域の特色に言及の力点を置く場合が多く、筆仕事を専門とする者の役割としては、いささか意外に思われよう。それを可能してくれるのが、学外地域の郷土史愛好家や研究団体との今日までの関わり合い、方々からの教示の御蔭である。「書く」実技のみを優先していたならば、この関係はなかった。自分がこれまで蓄えた、少しばかり拡がりを見せる地域とのつながりから得つつある知見と経験を、教育面の主要教科で割り切れない学びに転用、一言でまとめてみると新潟でこそ学べるもの、実用性を伴う和風文化への気付きを誘引し、新潟から日本海側、そして日本、東アジア(漢字)文化圏へと視座を延長できれば、至極簡単に口にされがちなグローバル化への対応も、理屈として可能になる。つまりは足元を確かめてからの始発を受講生に説く上で、日本文化の範例が新潟に豊富に横たわっていることの教材化を、大きな学習目標に掲げるものである。

なお校種別・学年についてだが、書き方・文字を書く練習は小学校教員から全てを対象とする。文字に関する一般教養は、初歩的なものから始め、学年に合った内容を受講生が意識する。新潟の話題に関しては、地方都市の魅力を捉えるねらいで学び、これも小学校教員以上、全般の学習内容に設定する。難しく説明するより、平易に伝え理解させることをまず念頭に置く。拙稿も、この点を心懸けての執筆に努めた。

また、教科専門の講義と違い、教育方法を主題とする。難しいのはこの点で、肝心なのは臨場感を持った教室の雰囲気作りに努めることであろう。坐って受け身型の聴く流れにしないよう、時間を区切つての集中型思考の後、声に出して自分の意見を発表する、前に出て黒板に書かせる。周囲とのグループ討論・意見交換、以上を包括した模擬授業の回数を短時間で多目の回数設定を目指す。

問いかけへの反応・発言は、声が小さいのと「わかりません」の連発になりがちだが、その原因は突きつめてみると、質問をした授業者自身の工夫の足りなさにある。発問の内容の重要度、期待、予想する回答例、問題を解く鍵の提案の仕方、「わかりません」と言わせない努力が教員の側に求められる。

また声の出し方、話す速度、大小抑揚等発声法、表情、黒板の使い方、教室の立ち位置等の所作の範は、

教師にある。この点をとくに意識して講義に臨まなければ、所詮教員を目指す学生への真のプラスにはならず、教科専門科目の講義と変わらない。

本稿にまとめたプランは、教員養成に寄与する総合学習的講義として展開を試みる所存である。

## 学習支援ボランティア「鑑郷おたすけ隊」大募集!

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	全校
4月							自転車教室
5月		買い物学習 野菜の苗植え 地区探検			田植え		環境整備作業 運動会用具係
6月	さつまいも植え		大豆の種まき 町探検	※お年寄り との交流会			プール監視
7月		音読学習 野菜パーティー		昔の西川と 伝説学習	米作り学習		プール監視
8月		野菜畑の草取り	大豆畑の草取り				夏休みお楽しみ会
9月	昔の遊び 体験型子ども安全教室	白玉だんご作り	縄ない	絵手紙	裁縫 稲刈り	エコクラフト	全校山登山 マラソン大会
10月	さつまいも堀り	町探検		新川と西川の講話		キャリア教育	環境整備作業
11月	さつまいも茶巾しぼり				米収穫祭	キャリア教育 ※食育	地域防災訓練
12月			書写指導			キャリア教育	もちつき大会
1月							書き初め指導
2月				二分の一成人式			
3月							
通年	○読み聞かせ    ○校外学習引率    ○クラブ活動補助    ○登下校の見守り など						

★昨年度は、上記のような活動をしました。※印は、今年度、新規に計画している活動です。子どもたちの教育活動と一緒に参加し、御協力して下さる方を募集しています。

★その他のボランティアで可能なことや、やってみたいことがありましたらお問い合わせください。